

生徒がつくる体育祭

【 幹部団のリーダーシップ 】

「100m競争のいつ始まったんだか終わったんだかわかんない、あの状況を何とかしたいんですけど」。委員長のひと言から、競技の全面的な見直しが始まりました。

本校の体育祭は生徒会が実行委員会を組織し、企画・準備・運営・総括に至るまですべて生徒主体の活動になっています。前年度中に「幹部団」が選出され、5年生の実行委員長を中心とした数名の強力なリーダーシップのもと運営されていきます。4月に入ってから決まる各クラスの実行委員は、各種目のエントリーや一人ひとりに配られるゼッケン管理など、いわば選手（クラス）と幹部団とのつなぎ役に徹します。そして当日の運営は、幹部団と連携して組織された、各運動部の部員が担っていくのが東大附属の体育祭の大きな特徴となっています。

さて、2006年度の委員長は何を言おうとしたのか。

本校は100mの直線コースを持つ1周300m×6レーンのトラックと野球グラウンドという、都心部には恵まれた運動場を有しています。体育祭もそのグラウンドを縦横に使って行うのですが、本部席・生徒席の設置に制約が多くホームストレート側には何もおけないのです。バックストレート外側に本部席を設置し、生徒席は第3コーナー辺りでそこから応援するような形になってしまいます。そこで各種目のゴールをその目の前に持ってきてあるのですが、100mだけは反対側の本来のホームストレートで行っていました。開会式直後の種目ということもあり、生徒席から一番遠いところでゴールする100m競争は注目度が低かったのです。陸上部の短距離ブロック長でもある彼女はそこから手をつけようと言うのです。

「ゴールの位置を他の種目と合わせようよ」「せっかく直線で100m走れるグラウンドなのにわざわざコーナーを走るの?」「でも100mで直線使わずに済んだら、他の種目では3レーンまでしか使わないからさ、保護者席をずいぶん確保できるんじゃない?」「大会記録はどうするの?条件が変わったら意味なくなるかな」「もともと風向風速もとってないし、生徒が一人で計測してるから誤差が大きくてあんまり意味ないなと思ってたんだよ。この際、体育祭における大会記録は、無くしていこうと思っているんだけど」

幹部団と担当教員による話し合いで様々な可能性を検討していきました。近年たくさん駆けつけてくださるようになった保護者のためのスペースがほとんどなく「子ども達の姿が遠くて見えにくい」という声が多く寄せられていました。委員長はコーナーからスタートして本部前を駆け抜ける100m競争の実施を決断しました。このことで3.6m×100m近い広大な保護者席が確保されました。いままで遠く斜め方向からしか見えなかった競技が真横から応援できるようになったのです。

また各チームのスローガンが書かれた手作りの垂れ幕を、それまでは少し離れた校舎の3階から垂らしていたのですが、これを大きな旗のかたちに変更してコースに隣接した防

球ネットに移動、競技中に常に目にはいるようにして雰囲気を高めました。他にも「トップスピードでバトンの受け渡しをするのがリレーの醍醐味」ということで、男女混合のリレーで男女の走る距離に差をつけ、疾走スピードをあわせるなどの改革がこの委員長のもと行われました。



スローガン旗の前での伝統競技「東大連峰」

が多くなっていたのです。

また彼女は前委員長が打ち立てた「体育祭空間の祝祭性を高める」という課題意識をひきつぎ発展させるべく心を砕きました。保護者席側だけでなく本部席側を使う全ての種目も3レーンから内側で実施し、その外側のレーンを本部と生徒応援席と新たな保護者席にあてました。リレーなどは第2走者まではセパレートコースですが、それ以降はオープンとなり一番内側のレーンを走っているにすぎません。ですから、これまでの方式ですと7m以上離れたところをランナーは走っていったのですが、今や目の前を駆け抜けていくことになりその迫力は以前の比ではありません。走っている方にして、応援の声と顔、顔、顔が目の前を流れていき、気持ちが盛り上がることこの上なしです。

それだけではありません。何もなかった応援席に大量のテントをズラッと設置して競技場と応援席との空間に区切りをつけました。以前はどこか広々すぎて間の抜けていた会場がテントのおかげでぐっと引き締まる「万国旗効果」がでるとともに、例年は炎天下どうしても体育館脇の日陰に大勢流れていた生徒たちが応援席に定着してくれました。

また、これまでの胸につけるゼッケンだけでは遠くから観るとチームを判別することが難しかったのですが、着るタイプの色別のビブ

ここ10年間でなんと8人までが女子の実行委員長でした。中でも2007年度はめずらしく運動部以外から出た委員長として、経験だけに頼らず膨大な全校アンケートの分析をもとに新たな風を吹き込んでくれました。4種目あったリレーを2種目に減らし、かわって綱引きなど、より大勢が出られる種目を導入しました。

そもそも競技自体の練習時間がとりたててありませんので、競技内容を全校生徒に理解してもらいわずかな予行の時間を有効につかって滞りなく本番を遂行するのは並大抵のことではありません。説明にかける時間を少なくし教室へのプリント掲示で段取りの周知徹底をはかるため自然と単純な競争種目(特にリレー)



応援席の前のデッドヒート

ゼッケンを導入してどこからみても競技の状況がわかりやすくなったので応援にも一層熱が入り、チームとしての一体感を高めることができました。

このときの幹部団には、監察審判を担うテニス部・召集誘導を行う野球部・当日の用具の準備を一手に引き受けるサッカー部(用具の製作はクラスからの実行委員)などから意欲的な生徒が入り、委員長を盛りたてました。予行をほとんど行わずに生徒だけの力で実施が可能なのは、やはり年ごとに入れ替わる実行委員だけでなく、運動部が縦のつながりを活かして当日の運営にあたるため各系の経験がしっかりと継承されていることが大きいのではないかと思います。

伝統校の遠くにまで知られた大規模な体育祭には比べるべくもありませんが、それでも6学年併せて700人あまりの小規模な学校の良さを活かし、手作り感にあふれた牧歌的行事として生徒たち自身の手で営々と築かれてきたのが東大附属の体育祭です。つい数ヶ月前までランドセルを背負っていた1年生から、もう大人といってよい6年生までが一堂に会しての一日はまさに学校が一つになる大切な日なのです。

今年度の体育祭がどのように準備運営されてきたのかをここで振り返ってみましょう。

【 挫折禁止！ 】

前年度の体育祭終了後、すでに次年度のスタートといってもよく、幹部団の仕事は全校生徒と教員に対してアンケートを実施し集約、それに各系の反省を加えた総括を行い、夏休みまでにまとめておくこととなります。夏休みと春休み中のそれぞれ1日をかけて生徒会研修会をおこない、ここで現幹部から次年度の各実行委員幹部候補者への引継ぎがおこなわれています。たいていの場合、「次は自分が委員長に」と考えている4年生が『見習い』のように幹部団に入って5年生と一緒に仕事を進めていますので、その次期委員長候補を中心に「我こそは」と考えている下級生が研修会に出席するわけです。

総括を引き継いだ4年生の幹部候補者は、次年度の目標、種目とプログラム順、ルール、競技エリアの設定に至る詳細なところまで時間をかけて見直していきます。生徒会長選挙を経て2月中に行われる二大祭幹部団の正式な選出手続きが済むといよいよ活動が本格化します。「挫折禁止!」「東魂」「闘志貫徹」などの大会スローガンを決めてから春休みに突入すると、もう目の回る忙しさです。はじめに述べたように東大附属の体育祭は、伝統を守りながらもその時代の生徒、保護者の意見を大切にして変化してきています。ルーティンワークではないのです。

特に例年と変更がある場合には生徒の同意だけでなく、担当教員を通して職員会議にその是非を諮り承認を得なければなりません。しかもこの会議は4月に入ってからの新年度になります。5月の体育祭に間に合わせるにはほぼ一回勝負といってもよく、改革案が説得力を持って説明できるよう慎重かつ大胆に事を運ばなければなりません。満を持したはずの案が受け入れられずに悔し涙を流した幹部団も少なくありません。それでもめげずに残された日程でできる限りのことを追究しなければなりません。まさに「挫折禁止」です。

さらに競技図作成や進行表・ルールブック・応援団募集要項・本番までの予定表など、

予行練習がほとんどできないなか全校生徒が理解し活動できるようにしていく必要があります。特にエントリー表の作成は大仕事で、これを経て幹部団は「エクセル」入力の人になっていくほどです。

【 教員が静かな体育祭 】

2009年度体育祭は、5月の第3土曜日に行われました。教員の怒声とは無縁に、実行委員が自分のクラスの生徒を整列させ出欠を取りゼッケンを配るところからスタートします。体育の時間を使った練習は全くなく、授業をつぶしての予行練習は平日の午後に1回行われるだけです。段取りは充分とはいえないのですが、予行から実行委員の生徒の指導で丁寧に進めていくため皆が協力的です。

競技は3クラス×6学年の縦割りチームの対抗戦となります。赤・白・青のそれぞれのチームを鼓舞する「応援団長」は、ここでも幹部学年である5年生から出て、一日の熱い闘いのために精を込めて準備を重ね6学年を仕切っていきます。実行委員長が開会宣言をおこない、管弦楽部の演奏のもと手作りの体育祭旗が掲揚されます。学校長挨拶の後、優勝杯返還と選手宣誓が応援団長3名によっておこなわれます。



応援合戦

開会式後はエール交換、そして各チームの応援団による応援合戦です。6学年がそろって練習をできる時間を確保するのに苦労しながら昼休みや放課後に集まってこの日に備えてきました。チームのスローガン旗を掲示するセレモニーから始まり、音楽に合わせておよそ5分の演技で、応援団員によるダンスや仮装が披露されます。毎年趣向を凝らした表現がおこなわれ学校全体が暖かい、和やかな雰囲気になります。

実行委員長の号令のもと準備体操がおこなわれ、いよいよ競技開始。アナウンスも実況中継もすべて生徒会放送局を中心に委員が担います。審判長以下スターターも監察も全て運動部ごとに組織された生徒の審判員です。毎年、競技プログラムの1番は全校生徒参加の大玉送り競争となっています。チーム全員の頭上を大玉が転がり、後方までいった大玉を応援団長と副団長が前方の旗まで転がして持ってくる速さを競います。この競技の順位がよいほどゴールに近い応援場所が確保できるため、どの組も真剣に取り組みます。大きな上級生が小学生のような1年生を庇いながら競技を進行している姿は微笑ましいものがあります。

男子の騎馬戦、女子の棒引きは特に大人数で盛り上がる種目です。騎馬戦も女子は帽子の取り合いだけなので安心して見ていられますが、男子は騎馬の崩しあいだけに教師が競技のまっただ中に入り、けが人が出ないように注意しています。でもそこは何事にも熱くなる年頃なので、ご多分に漏れず保健室



男子に人気の騎馬戦(教員はハラハラ・・・)

のお世話になる生徒が毎年何人も出てくることになります。女子が熱くなるのは棒引き競技です。観戦しているとバーゲンセールに殺到する女性が連想され、思わず笑いがこみ上げますが選手はぶつかったりひきずられたりして擦り傷だらけ、必死です。こうした楽しい競技種目も毎年の実行委員会で少しずつ改良を加え、伝統の中にも毎年新しい企画が立てられ実行されてきています。

閉会式の挨拶では、毎年のように委員長が声を詰まらせ涙ぐむ姿が見られます。改革がうまくいった達成感、判定を巡るトラブルや運営上のミスをなんとかおさめきった安堵感、これまでの取り組みを振り返って様々な思いが去来するのでしょうか。各チームの応援団長もまたしかりです。自分の力不足を思い知らされたり仲間との軋轢に苦しんだり、そして支えてくれる手の暖かみを知った最後の一日は勝っても負けても涙、涙、そしてとびきりの笑顔。もちろん、運営に携わった全ての実行委員や要員が自分の責任を果たした充足感に包まれているのでしょうか。選手として参加した一人一人が「ワクワク、ドキドキ、ハラハラ」を共有してくれたことでしょうか。若者たちのこうした姿が、私たちに日常の結節点としての行事の意味を教えてください。